

なったことから、東満州の各部隊から技術者が集められ、鉄の増産と満人従業員の督励を兼ねた作業隊が編成されることになる。

執筆者は、入隊前の経験が選抜の対象となったのかこの作業隊に転属命令を受ける。鞍山製鉄所作業隊（技術部隊）で満州第五一五部隊（幸二〇四一五）と称された。雑のうを肩に、腰にはゴンボ剣という軽装で、隊列を組んで工場通いが開始された。巨大な溶鉱炉の材料、広大な庄延工場、まるで生きもののようにローラーの上を這いまわる灼熱の鉄棒や鉄線が溶鉱炉から出て来る「鉄」が凄まじい火花を飛び散らせる。

昭和二十年八月、日本は建国以来の悲惨な敗戦を味わった。作業隊として鞍山に転属していた執筆者は、その悲運から一応逃れたものの、終戦の詔勅を宮庭に整列し、涙して聞いたという。

顔が思い出されます。

これからは本当の初年兵教育を受ける身、同年兵同志で「厳しい苦しいのは皆一緒だよ、頑張ろう」と共に励まし合い、気持ちを奮い起こし、お互いに頑張りました。

四一式山砲の分解搬送や駄馬訓練は、その凄さの一言につきまます。一致団結しないと怪我をします。一期検閲も終わり、初年兵も一般勤務に就くことになりました。初秋、師団の総合演習に参加、演習も終盤に入ってから水難事故が発生しました。

老黒山南村一帯の河川敷に天幕を張って野営演習中、二三日前から天候不順でしたが、急に河川敷に濁流が増水して来ました。その時、教官が気付き演習を中止、直ちに引き上げ、木造の橋を渡り助かったのです。中隊のいる河川敷に帰ったから、中隊も高い所へ移動しておりました。中隊の天幕の中には兵隊全員の身の回り品を置いてありましたが、これを全部整理して、老黒山本隊へ引き上げの準備が完了、直ちに出発ということで大

軍隊の思い出

— 満州、沖縄、台湾 —

富山県 寺井義光

私が農家の長男として生まれて、当然、農業を継ぐ予定で家業に励んでまいりました。軍隊生活について書くとしても戦闘に参加しておりませんが、昭和十七（一九四二）年度の徴兵検査を終え、昭和十八年一月十日、現役兵として富山東部四十八部隊（満州派遣第九師団歩兵第三十五連隊）満州第二百二十一部隊連隊砲中隊に初年兵として入隊しました。

二カ月の基礎教育を受け、三月九日晚、満州へ向け富山駅を出発、下関、釜山、延吉を経由して北満の牡丹江省東寧県老黒山にあった本隊の連隊砲中隊へ到着しました。初年兵を待っていた昭和十四年徴集の現役四年兵の方が「初年兵来たか、頑張れ」と我々を励まして、内地へ除隊された笑

変な強行軍だったと思っています。

夕方に帰り、中隊長の訓示があつて解散しました。身辺の整理をして、一夜明けた朝、点呼時に、河川の被害甚大で、山砲一個大隊がまだ河川の中州に残されているということで、朝食後直ちに救助隊を編成し、捜索に出発しました。約一週間、捜索に専念していたと思います。その時の溺死者は四十人程と聞いています。我等は教官の判断が良かったから無事に帰れたのですが、橋が流されていたら大変、山砲隊と同じ運命になっていたかも知れないと思いました。

九月の人事異動で連隊長が交替となり、後任連隊長に奥信夫大佐が着任しました。連隊長は、教育の重点として「将校教育の徹底。健兵対策としては自給自活のため野外すべてを畑とし、営外はすべて駆け足」と言われ、凄い連隊長が着任したものだ、緊張感が溢れました。

我等は九月から十二月まで連隊の下士官候補者隊で教育を受け、十二月二十八日に中隊へ帰りま

した。

昭和十九年一月三日、連隊から南方部隊へ転属が発令されました。その中に十二月まで私等の教育係班長さんであった方の名前があるのでびっくりしました。お互いに元気でと老黒山駅まで見送りに行き、またびつくりしました。そこで私の小学校の同級生高井君と出逢ったのです。

高井君は「転属だよ」と言い、私は「えっ」と胸がつまりました。お互いに元気で頑張ろうと別れましたが、一月十六日、九州沖で彼の乗った輸送船が米潜水艦の魚雷攻撃を受け、あの時の別れが最後となりました。その船には歩兵第三十五連隊の兵隊さんが三百八十五人乗っており、その内奇跡にも百三人が助かりました。

私等も一月五日、延吉下士官候補者教育隊へ入隊しましたが、二月頃から特に太平洋戦線の戦況が我に不利な状況となり、そして関東軍の南方転出が多くなると共に、候補者の所属する本隊の移動も多くなり、本隊へ帰る候補者も出て来まし

準備をし、六月二十三日、老黒山より鉄道輸送で二十八日に釜山に集結、出発を待ちました。

いよいよ乗船、十二隻の船団で七月一日出港、門司経由、五島列島を通りジグザグと潜水艦を避けながら鹿児島港に寄港して仮泊しました。ここでは民家の風呂に交替でお世話になり、思いもしない心の慰めとなりました。

鹿児島湾を出港してから師団は沖縄に行くと言われられました。輸送船団は米潜水艦を避けるためジグザグ航海を続け、兵隊は出来るだけ甲板上にいて、魚雷攻撃を受けて海に放り出されても、船の沈む波に巻き込まれず、素早く外に逃げ救助を待つことと言われました。しかし当時の戦局から見ても無傷で入港出来たことは奇跡でした、七月十一日、那覇港に無事入港することが出来ました。

これから沖縄第三十二軍牛島満軍司令官の傘下に入りました。警備は南部地区で、国吉集落では連隊砲中隊が最初に陣地を構築しました。ここは当時沖縄戦線の大激戦地で、今では白梅の塔（沖

た。そのため連隊の教育隊も三カ月で一期で終了とし、検閲を終えて教育隊は閉鎖となり、私等も歩兵第二百一十部隊へ復帰しました。

すると教育隊と一緒に訓練を受けていた同僚が中隊に転属して来ました。話を聞きますと、本隊が満州遼陽に在った歩兵第三百十八部隊で、同部隊はサイパン島へ二月に転出し、孤軍勇戦を続けたが玉砕したとのことでした。そして連隊砲中隊の全員は残留となって歩兵第二百一十部隊に転属になったという。そして各中隊に分散して配属となり、我が中隊へは下士官以下二十人が入り、同じ釜の飯を食べることになりました。岐阜と愛知県出身の方たちでした。歩兵第二百一十部隊へ来て玉砕を免れたことは、自分で選んだことではないが、これも運命でしょう。

歩兵第二百一十部隊も、六月中旬から和光屯老黒山南村一帯で野営しての演習中の六月十九日に転出命令が下り、教育隊は解散し、私は中隊復帰となりました。そして我等も本隊と一緒に転出の

縄県立高女の職員、女学生の看護婦）に一〇三柱を奉塔してあります。そのほかに糸満、名城ハブ島、大里等でも陣地構築をしました。住民たちはあらゆる協力を惜しまず、一緒に働いて下さったことは忘れることはできません。

十月十日、沖縄大空襲がありました。朝八時頃から夕方まで凄まじい飛行機群の波状攻撃に、那覇市及び糸満市の市街は瓦礫の山と化したのです。いわゆる十月十日大空襲で、あの惨事には日本の飛行機は一機も見えず、高射砲の射つ弾も敵機に届かないという有様でした。

十月十五日、沖縄に初年兵が入隊し、その初年兵係を命ぜられました。そしてその後も部隊は陣地構築に専念しました。しかしフィリピンや南方諸島の戦況は非常に厳しい状況となり、「武」部隊（第九師団）が沖縄より転出することが決定しました。

十二月二十八日、那覇港より出発、行先不明である。天候は暴風雨で、輸送船も木葉のように揺

れ、甲板の上に積んであったドラム缶が崩れる。船は南下してどこに行くのか、ここでも米潜水艦には出逢わずでした。二十九日晚に着いた所がフイリピンでなく台湾の基隆港でした。実は台湾から第七師団が転出するので、その後詰として急遽台湾行きに変更されていたのです。

こうして第九師団は台湾第十方面軍の指揮下に入りました。司令部は新竹州に置き、同地区の防衛につき、歩兵第三十五連隊は師団と離れて高雄要塞司令官の直轄となり、連隊本部は高雄州鳳山郡庄林子辺小学校に位置し、連隊砲中隊は林子辺農学校に位置して周辺の警備を担当、そして海岸で敵前上陸の演習及び戦闘訓練に励みました。

昭和二十年一月九日、沖繩の初年兵の一期検閲が修了し、一般の勤務に就きました。そして一月三十一日、歩兵第三十五連隊は師団に復帰を命ぜられました。満州部隊の第十二師団歩兵第二十四連隊（老黒山から転出の時後を引き継いだ部隊）にまた御願いして、二月六日、新竹の防衛に着き

ました。歩兵第三十五連隊本部は揚梅国民学校に位置し、連隊砲中隊は旧湖口に位置し、陣地構築に終始しました。

二月十日、台湾省にも徴兵制度が施行され、その第一回徴兵「台湾出身者」が入隊し、その教育班長を命ぜられました。逃亡兵を出さないこと、初年兵の心情を把握するために教育係助手として上田兵長と村田兵長に協力してもらいました。六月には台湾の初年兵の一期検閲が修了、逃亡兵無しで連隊長より褒めの言葉をいただきましたが、これは教官はじめ助手が一致団結した結果と思いい感謝しておりました。初年兵は二泊三日の外泊許可を貰い、外泊後も全員無事帰ってきて一般勤務に就きました。

私は引き続き昭和十七年度下士官候補者（二年度）の集合教育の班長を命ぜられました。

ここで沖繩は今どうなっているのだろうか、故郷のような沖繩のことが心配になりましたが、四月に米軍が上陸以来、激戦を重ね、苦戦していた

が、六月二十三日、牛島満司令官及び長勇参謀長が自決し、第三十二軍は玉砕をしました。

八月十五日正午、天皇陛下の終戦の詔書の主旨を完遂するよう命令あり。第九師団は蒋介石軍により武装解除されましたが、捕虜生活を送ったわけではなく、自活体制を整え、連合軍の指示する諸作業に従事し、一月二十三日帰国。浦賀港に上陸しました。

戦後、第九師団は全くの幸運部隊と言われました。満州、沖繩、台湾と転線しましたが、部隊としては砲火を交えず、死者もほとんど出していません。

もし満州に留まっていたらソ連の抑留生活だろうし、昭和十九年に台湾へ転出していなかったら、沖繩戦で玉砕して多くの死者を出していたに違いないと思えば、誠に幸運の部隊でした。命拾いをしたわけで運は紙一重だと思ひ皆様に感謝いたします。

戦後六十年、連隊砲中隊戦友会「四十八会」は

平成十七年七月二十五日、宇奈月温泉で一泊二日で開催しました。皆高齢ですので最終会とさせて頂きました。復員してから農村の復興、食料の増産に励み、農業委員を三期、土地改良区地区会長等の世話をさせて頂きました。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年一月十日、現役兵として富山東部四十八部隊（満州派遣第九師団歩兵第三十五連隊）満州第二百一十部隊連隊砲中隊に入隊、二カ月の基礎教育の後、北満の牡丹江省東寧県老黒山にあった本隊に到着する。そして四一式山砲の分解搬送や駄馬訓練など「凄いの一言」に尽きる猛訓練を受ける。そして九月から三カ月の士官候補者教育を受け、原中隊へ帰ると、連隊から南方部隊へ転属が発令される。

かくして執筆者が記し、戦後、語られているように、第九師団は全くの幸運部隊となった。満州に留まっていたならばソ連抑留だろうし、沖繩か

ら台湾へ転出していなければ沖縄戦での苦闘を強いられた、ことを思えば、誠に幸運にも命拾いをした、と述懐する。

大本営は昭和十九年後半より、比島戦線の推移に伴って、同方面の戦備強化に努力を傾けていた。特に比島決戦に対処するため、台湾から第六十八旅団、さらに第十師団をルソン方面に転用したため、台湾の戦備補填が急務となっていた。このため中国、満州より師団を台湾に増派すると共に、台湾に一軍司令部、五独混旅団を新設するなどを行っている。

また、これらの陸上部隊の防備強化と共に航空作戦準備の促進にも努力が払われている。

台湾の地上部隊の増強は、右に延べた転用、増派のほかに、台湾に独混第七十五、七十六旅団の新設、基隆要塞等の防備の強化、そして沖縄本島に所在していた第九師団を北部台湾新竹地区に転用して第四十軍の指揮下に増強したことである。

具体的には、第四十軍司令部を台湾嘉義に新設

して台湾南部の防衛を担当させ、ここには満州より第七十一師団を転用して指揮下に入らせている。これらは昭和十九年一月頃の動静であるが、二月にはさらに独混第百、第百二、第百三旅団を新設、高雄、花蓮港、台東地区の防備に当たっている。

そしてこれらの新設部隊の要員、装備・防備品等は南方へ転進中台湾に滞留している部隊、兵員、軍需品などを以て充当したと言われる。ここに体験記執筆者も台湾人の入隊、その教育を担当したことを記録しているように、二月一日、台湾人に対する徴兵制度施行によって新設部隊に入隊した台湾人は二〇〇パーセントに達したと言われている。

また、第九師団の台湾の転用には、昭和十九年十一月、大本営が牛島第三十二軍司令官に内示した際「沖縄本島防衛の責務が果たせない」旨を申言し、代案として姫路に待機していた第八十四師団の沖縄増援を準備したと言われる。

しかしこの増援は海上輸送の困難性と本土防衛

戦争体験を語る

富山県 東山 宏

大正十一（一九二二）年八月九日、富山県中新

川郡釜ヶ淵村末三賀に生れる。現在は富山県中新川郡立山町末三賀となっている。家族は祖父母、父母、兄弟は男三女一人でした。釜ヶ淵村立尋常高等科を卒業、専修学校を一年で退学、昭和十四年一月十五日、名古屋陸軍造兵廠に入廠する。昭和十七年五月、徴兵検査、同十八年一月十日、富山東部第四十八部隊第二機関銃中隊に入隊（元富山三五連隊）しました。

その前日の一月九日、釜ヶ淵村民や小学校生徒及び親族一同の歓呼の声に送られ、故郷を後に電車で出発、その日は富山市内の旅館に一泊、明けて一月十日、新雪を踏んで富山連隊に入隊しました。広場で私服と軍服に着替えが終わると昼食で、既に机に配膳してありました。班長は「食事

強化の重要な折でもあって回避され、ために海軍側の大本営陸軍部に対する不信と不満を増徴させるのみでなく、当事者の第三十二軍司令部に与えた感情と意志疎隔の禍因を作ることとなったと言われている。

しばらくして沖縄守備隊は新事態に対処する新陣地構築という緊急にして最難事に直面することとなった。